

---

**運の悪い子供たち** ~ BATTLE ROYALE ~

Maki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運の悪い子供たち 〔BATTLE ROYALE〕

### 【コード】

N4688J

### 【作者名】

Maki

### 【あらすじ】

この小説は「牧」のIDで書いていた同名の小説をコピーしたものです

中の人は同一人物なので盗作とかじゃありません。詳しくはこのIDのマイページをどうぞ。

「これから殺し合いをしてもらいます」 27人の男女による史上最悪のゲームが幕を開ける。ゲームを「やる気」の人間、全員の生存を望む人間、仲間を集める人間、脱走を企てる人間、自殺を図る人間。最後に笑うのは、いったいどの人間？

## プロローグ（前書き）

この小説には残酷な描写があります。

血を見るだけで吐きそうになるような人は読まないほうがいいです。

## プロローグ

2009年 9月17日

東京都内某中学校 1年B組教室

「突然ですが、明日の授業は無くなりました。明日は校外学習になります」

教師の一言によって、教室の空気は一瞬止められた。そして無音が教室内に広がる。

「詳しいことはこのしおりに書いてあります。とりあえず読んで下さい」

そう言う教師は、教師から見て一番左の列から青い紙を配り始めた。

少女のもとにもそれが回って来る。

「校外学習のしおり」と大きな文字で書かれたその紙には、明日のスケジュールや持ち物などが書かれていた。

あまりに突然な報告に凍り付いていた教室の空気が、少女の発言によって融とかされる。

「あの・・・どうして報告が前日なんですか？」

「・・・え〜と、君たちを驚かせたかったんだ・・・サプライズ、つてやつかな？」

「・・・・・・・・。。。」

少女は納得していない様子だったが、話は続く。

「と、とりあえず明日はしおりに載ってる通りの時間に持ち物を  
持って来てください。以上です。」

あ、今日は掃除はありません。家でゆっくりしてください」  
教師は上ずった声で早口にそう言う。

「では、解散」

生徒全員を納得させられないまま、教師は話を終えた。

## プロローグ 2 (前書き)

殺し合いゲームが始まるまで物語は少女視点です。

## プロローグ 2

少女は帰宅した。

少女の名前は「松原彩香」まつはらあやか。

東京都内某中学校の1年B組の生徒である。出席番号は22番。

電話のダイヤルを押し、母親に帰宅の報告をした。  
校外学習のことはめんどくさいから母親が帰宅してから言うことにするらしい。

リモコンを取り、テレビをつける。

放映されていたのはちょうど、ニュースだった。

化粧の濃いキャスターが淡々とした口調で話す。

「今日、『戦闘実験第六十八番プログラム』の実施年齢の引き下げが発表されました」

「戦闘実験第六十八番プログラム」・・・

中学3年生を対象に、無差別に選ばれた50クラスが殺し合いをさせられるもの。

小学校6年生の社会の時間でこのプログラムの存在を必ず教えられ



る。

しかし少女は中学1年生。まだ、実施年齢ではない。  
関係無いな、と言った顔でニュースを聞き流していると……

「今年度からの実施は中学1年生のクラスとなります。」

少女の動きが止まった。

「え……?」

思わず口から声が漏れる。

そして、耳の中に教師の言葉が蘇った。  
あまりにも曖昧すぎる説明。

怪しい。

怪しすぎる。

でも……

「そんなこと、ない、あるわけ、ないよね……?」

自分に言い聞かせるかのように呟く。

日本にいくつ中学1年生のクラスがある？  
正確にはわからないが数え切れないほどあるはずだ。

その中でゲームに巻き込まれるのは、「50クラス」。  
そう、たったの50クラス。

・・・たった50クラスなのに、その中に入ってるわけ無いじゃない。何考えてるの、私。  
考えながらも、少女の手は震えていた。

「そ、そうだ、明日の準備しなきゃ」

声は裏返っていた。

「校外学習」のスケジュールは2日だった。

7時に校庭に集合、その後バスで移動、そしてフェリーに乗り、八丈小島という無人島に行く。

そして島で昼食を済ませ、昼は海水浴・夜は天体観測。そして宿に行って晩飯を食べて風呂に入って…

そこまで読んだところで少女はしおりを閉じた。

「……………」

少女は台所から包丁を取り出す。  
それをプラスチック製のカバーに入れると、そっとリュックの中に入れてた。

「も、もしも本当にそうだった時の備えだから……。校外学習だもん、ね……。？」

そう、これは「校外学習」である。  
仲間同士による、「殺し合い」の学習……。

**1年B組 生徒名簿(前書き)**

登場人物紹介です。

## 1年B組 生徒名簿

1年B組生徒名簿

生徒数 27名

担任教師

かくのこうたろう

角野孝太郎

新卒でこのクラスの担任になった教師。

経験の浅さからか、生徒たちには思いつきりナメられている。出っ歯な事を特にからかわれる。

出席番号1番

あすままこと

東真琴

テストや通知表の成績は優秀。しかし担任の角野には反抗的な態度をとっている。

頭脳：

運動：

容姿：ポニーテールで前髪がない。痩せている。

出席番号2番

いしこのおや

石井直也

極度のめんどくさがり。授業はまともに受けない。だが何故かもてる。

頭脳：

運動：

容姿：丸刈りに近いショートヘア。色黒。

出席番号3番

伊藤純子 いとうじゆんこ

授業態度がよくない。授業中に手紙を回したり、ちよつと不良っぽい女の子。

頭脳：

運動：

容姿：肩くらいの髪をおろしていて前髪ぱつっん。色白。スカートは短め。

出席番号4番

内野明 うちのあきら

下ネタ大好き。典型的な思春期の男子。勉強は数学のみ人並みにできさる。

頭脳：

運動：

容姿：丸刈りに近いショートヘアで黒い縁のめがねをしている。動物にたとえるならサル。

出席番号5番

小野翔太 おのしょうた

内野の親友。気になる女子に意地悪したり、こいつも典型的な思春期の男子といった感じ。

頭脳：

運動：

容姿：内野と同じような髪型で色黒、眉毛が特徴的な濃い顔。

出席番号6番

川口美咲 かわぐちみさき

流行に敏感。髪型もはやっているものにしょっちゅう変える。

頭脳：

運動：

容姿：今は肩までの長さで髪を巻いている。髪の色は栗色。

出席番号7番

岸野香夏子きしのかなこ

かわいいものが好き。明るい。典型的な中学生女子という表現がぴったり。

頭脳：

運動：

容姿：ポニーテールで前髪を左右に分けている。小柄で目がパツチリしている。スカートが短い。

出席番号8番

楠原桜くまはらさくら

岸野の友達。積極的なほうではなく、控えめ。

頭脳：

運動：

容姿：後ろで髪を二つに結んでいて前髪はぱつっん。

出席番号9番

河野修太こうのしゅうた

小野と名前が似ているのでよく間違えられる。授業妨害王。

頭脳：

運動：

容姿：丸刈り。目が小さく、肌が日に焼けている。

出席番号10番

斉藤風斗さいとうふうと

顔がさわやかなジャニーズ系。なのにモテない。しかし本人は気にしていない模様。

頭脳：

運動：

容姿：男にしては長めの茶髪。上記のとおり顔はさわやかな（略）

出席番号11番

しゅづげつななみ

秋月菜那美

限りなく大人しい性格。成績は優秀で、授業態度もいい。

頭脳：

運動：

容姿：肩までの髪をおろしていて前髪をそろえている。薄いピンクのフレームのめがねをかけている。

出席番号12番

たけつちりの

武内梨乃

クールなキャラ。頭がよくて冷静。戦いを好まない性格。

頭脳：

運動：

容姿：髪型はボブに近い。黒いふちのめがねをかけている。

出席番号13番

たなかゆきえ

田中優希恵

秋月の幼馴染。素晴らしいほどに運動が苦手。絵を描くのが趣味。

頭脳：

運動：

容姿：前髪がないポニーテール。髪は腰あたりまである。

出席番号14番

たにがわしゅうへい

谷川昌平

体調を崩し登校していない時期がしばらくあったが、今は至って普通の中学生。しかし・・・？

頭脳：



運動：

容姿：前髪がなく、後ろ髪が立っているショートヘア。体格がいい。

出席番号15番

たしぐちあじみ  
谷口亜里沙

明るい性格だが、「馴れ馴れしい」と裏で陰口を叩かれている。そのせいか決まった友達はいない。

頭脳：

運動：

容姿：武内と同じような髪型。歯の矯正をしている。色黒。

出席番号16番

てらたにしんのすけ  
寺谷真之介

一言で言つと「変わり者」。成績はいいほうだが、変な行動が目立つ。

頭脳：

運動：

容姿：色白で出っ歯。黒いめがねをかけている。

出席番号17番

はまぐちだいき  
浜口大輝

明るく、友達も多い。でもよくいじられるタイプ。

頭脳：

運動：

容姿：丸刈りで目がぱっちりしている。

出席番号18番

ふくだりんか  
福田凜歌

不良タイプ。授業を良くサボる上、殴り合いの喧嘩もしたことがある。が、殺し合いに参加するかは不明。

頭脳：  
運動：

容姿：胸あたりまでの茶髪のロングヘア。スカートはものすごく短い。

出席番号19番

ふじのたかのり  
藤野孝則

男子のリーダー的存在。不思議キャラ。何を考えているのか予測不可能。

頭脳：未知数

運動：

容姿：ショートヘアで、どこか間抜けな顔をしている。

出席番号20番

ほしのあつし  
星野篤志

天然。というかドジ。何をするにもみんなより1テンポ遅い。

頭脳：

運動：

容姿：丸刈りに近いショート。いつも笑っている。

出席番号21番

まつたけい  
松田幸樹

女の子っぽい顔の男。そのことをよくからかわれる。

頭脳：

運動：

容姿：肩くらい長さの黒髪。ちょっと女装すれば女。

出席番号22番

まつばらあやか  
松原彩香

物語の主人公。クラス内の女子となら大体普通に話せる。今は田中

たちと行動をとみにしている。

頭脳：

運動：

容姿：肩くらの長さで前髪を左右に分けている。天パ。好意的に  
いえばぽつちやりな体系。

出席番号23番

まつもとまりか

松本麻理華

誰にでもやさしい、人気者タイプ。友達も多く成績もいい。

頭脳：

運動：

容姿：髪を後ろで二つのみつあみにしている。背が高い。

出席番号24番

やすだわたる

安田渉

おそらく学年1ではないかというほど成績がいい。努力家。モテる。

頭脳：

運動：

容姿：女の子っぽい顔。小柄。

出席番号26番

やまなかなみ

山崎奈美

フィリピン人とのハーフ。明るい性格で、誰とでもすぐ仲良くなる。

頭脳：

運動：

容姿：茶髪がかったポニーテール。目が大きい。

出席番号27番

やまのしげしげ

山野将輝

クラスに一人はいる「嫌われ者」タイプ。ほとんど孤独。

頭脳：

運動：

容姿：目が細い。散髪に失敗したみたいな髪型。

髪色の記述がない人はみんな黒髪だと思ってください。

「頭脳」は学校の成績だけを見た評価です。

1年B組 生徒名簿(後書き)

誤字がないか心配です。

もしおかしい箇所があったらすぐにお伝えください。

001 疑い

目を開けた。

季節はもう秋だというのに、汗をびっしょりかいていた。体中がベタベタしている。

すごく嫌な夢を見ていたようであった。ドロドロした、生臭い夢。

「……………はぁ……………」

近くの時計で時刻を確認する。午前5時57分。

「お、珍しいじゃない。アンタがこんな時間に自分で起きるなんて母がからかうように言う。母は30分ほど前から起きていたようだ。」

「……………お腹すいた」

「あぁ、朝ごはんつくるから。ちょっと待っててね」  
足早に母はキッチンに入っていた。

（はぁ……………）

今日は校外学習。

もしかしたら、殺し合いかもしれないけれど。

昨日も深夜まで起きていた。

暗い布団の中でいろいろな事を想像してしまい、眠れなかったのだ。

(考えすぎだよな?・・・はあ)

今日何度目かの溜息。

キッチンに行くと、母が朝食を作り終えていた。  
いつもの朝食、目玉焼きとサラダとソーセージ。

(もし殺されちゃったらもうこれも食べられないよね・・・)

そう思ってしまった。

また、嫌な汗が額から噴出してくる。

「どうしたの?」

私の心中など知らない母が話しかけてくる。

「ううん・・・なんでもない」

「そっか」

そう言つと母は自分の朝食作りを再開する。

「・・・あかさ」

「ん?やっぱりなんかあるの?」

小声で言つたつもりだったのに、母はわざとらしくささえ感じさせる  
大きな声で答える。

「今日・・・校外学習あるって言ったじゃん」  
「・・・うん」

母の表情が、微かに曇ったように見えた。

「あれってさ・・・もしかしたら、『アレ』なんじゃないかって・・・」  
「・・・。」

母も私の言っている『アレ』が何なのか理解している様子だった。

「・・・か、考えすぎよ」

ぎこちない。

「・・・母は私が言ったことが本当か否か知っているんだろうか。」

「そつだよね。ありがとう」

真似する様にぎこちない口調で答えた。

「・・・それ以降、私が家を発つ直前まで親子の会話はなかった。」

午前6時40分



「ほら、7時集合でしょ？早くしないと遅れるわよ」

「わかってるって」

「忘れ物ない？着替えとか持った？」

「はいはい、全部持ってますよ」

時間があるからといってゆっくりしすぎたようだ。今頃になって慌  
てている。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

私は家を発った。

母の表情が寂しそうに見えた。

(考えすぎなんだよ、私……)

そう思いつつも、中学校までの足取りは重かった。

「おはよう」

「おはよう・・・」

校庭で最初に挨拶をしてきたのは優希恵だった。  
私が最近仲良くしている女子。

最初は純子たちと仲良くしていたんだけど・・・  
友情の裏のドロドロを見てしまっってから付き合っ気になれなくなっ  
た。

私が校庭についたのは2分前くらいだった。皆慌てている。危な  
かった・・・

ここで、最後の一人が来たようだった。

「遅い！早く！走って来い！」

「さっせん、ファミマで弁当買ってきてました」

なんというめちゃくちゃな言い訳。

最後の一人は藤野だった。家がすごい近いのに、何故なんだ・・・

「じゃあ早く、席適当でいいからバスに乗り込んで」

角野が急かす。

バスは貸切なはずなのに、なんでそんなに急いでいるんだろうか。

そんな疑問がわいてきたが、考えないことにした。

バスの座席は前から3列目の左、通路側の席だった。

窓側には優希恵、右側の補助席には菜那様が座っていた。

・本名は菜那美んだけど、なんか呼び捨てにするような仲でもないからなあ・・・

バスに乗って10分くらいになるだろうか。

うるさかった車内が静かになり始めた。

何故だかわからない。何故か・・・皆、眠り始めているのだ。

幻覚だろうか。車内には白い霧のようなものが漂っている。

それにシューシューという何かが噴出すような音も聞こえる。

「眠い・・・」

「ねむい・・・」

優希恵と菜那様もかなり眠そうだ。

「眠い」宣言をして5分も経たないうちに眠ってしまった。

(おかしい、何かがおかしい。そもそも運転手は起きているのか?)

そう思ったときだった。運転手が車を止め、立ち上がった。顔は見えなかった。

ガスマスクをしていたから。

運転手が何かの操作をして、ドアが開いた。スーツ姿のガスマスクが大量に侵入してくる。

(.....)

睡魔のせいで何も考えられなかったのか、考えたくなかったのか。何も考えが浮かんでこない.....。

ガスマスクたちが生徒を一人ずつ外に運び出しているころ。

私は眠ってしまった。

## 003 開始

「ん……」

目が覚めた。

私が寝ていたのは、何処ともわからない地面だった。

クラスメイトたちはもう皆起きていた。

何がなんだかわからないという表情の人が多かった。

私もこれから起こりうることを知っているだけで、よくわからなかった。

そしてその「わからない」の原因となっているのは私たちの首についている銀色のものだった。

「みんな起きましたかあ？」

誰かが喋っている。

運転手だった。

ガスマスクを外したその顔は、鼻が低くてお世辞にもかっこいいとは言えない顔だった。

「うん、皆起きてるね。じゃ〜話を始めましょうか〜」  
誰も返事をしていないが運転手は勝手に話を進めている。

「まず自己紹介です ワタシは、黒田修三くろだしゅうぞうと申します〜。

職業は・・・うん、政府のヒト、とでも言ったほうがいいかなあ？」

挑発するような口調で喋る。こいつは黒田っていう奴らしい。

「え〜と、わかってる子もいるだろうけどこれからキミたちにしてほしいことを説明するね」

何をする・・・いや、しなくてはいけないのか、もうわかってる。わかってるよ。

そう、

「これからみんなで殺し合いをしてもらいます」

殺し合い。

沈黙は一気に破られ、大きなざわめきが広がる。

「うるさいですね〜、静かにしないとこれで撃っちゃっぞあ〜」

黒田が持っていたものは

・・・銃。

何の銃だかはわからないけど、やたらとでかくて重そうな銃だった。

この一言が効いたのであるう、ざわめきは一瞬で静まる。

「はい、よくできました　じゃあ説明を続けますね。」  
皆、暗い顔をしていた。

「まあさつき言ったとおり、キミたちにはこれから殺し合いゲームをしてもらいます。」

もう脱走や一揆以外は何やってもOKだよ。

島にある施設から武器もらってもいいし、食べ物もあつたら食っちゃっておつけ。」

とりあえず1人残れば何でもいいよ

基本的にそれだけなんだけど、色々言つとかないといけない事があるから詳しく説明するね」

「まず、キミたちの首に付いてるそれ。見たらわかるだろうけど、首輪です。」

これを無理やり取ろうとしたり禁止エリアに入ったりすると・・・ドカンしちゃいます」

首輪を触っていた人たちが驚いて首輪から手を離す。

「あゝ、臆病な子たちだねえ」。触ったくらいじゃ爆発しないから



大丈夫だよ。

ちなみに脱走しようとしてもドカンしちゃうからね。

発信機がついてるから、キミたちがどこにいるかはお見通しなのだ  
)

じゃさつき言った禁止エリアってのを説明するね。」

そう言うと黒田は大きな地図を広げた。

「この島の地図です。キミたちにも後でちっちゃいのが配られるからね。

コレ、マス目が入ってるでしょ？

ゲーム開始からしばらくすると、このどれかのマス目が禁止エリアになっちゃうんです

もちろん禁止エリアは入っちゃダメだよ。死ぬからね。

地面に線とかないから、動いてたらいつのまにドツカ〜ン！なんてことにならないようにねっ」

黒田と生徒の間にある温度差。

「次は定時放送について説明するね。定時放送って言うのは、1日に4回ある放送のことです。

放送時間は、午前と午後の12時と6時！大事な事も放送するから、ちゃんと起きてるよ〜。

定時放送では、前回の放送との間に死んじゃった人のご報告と、放送から1時間後、3時間後、5時間後に禁止エリアになっちゃうところの座標も放送します

禁止エリアに入るとさつき言ったとおりドカンするから、聞いたいたほうがいいぜ〜」

「あと、これからキミたちに渡すものの説明ね。持ってきて」

黒田がそう言うところからか兵士が黒いバックを持ってくる。

「これがキミたちに配られるバッグです。中身を出してみましよう。」

・入っていたのはパンが3つ、1?ペットボトルが2本、地図、方位磁針、時計、懐中電灯だった。

「これとランダムに武器が一個入ってます

武器には当たり外れがありません。銃が入ってるか、ゴミが入ってるかはキミたちの運しだい

ま、運も実力のうちって言うじゃん?でもどんなのが出ても自殺しちゃだめだよ。」

「あー、優勝したら何ももらえるかも言っておこうか。

優勝したら仕事しなくても裕福に暮らせちゃう権利がもらえちゃいます。素敵ですね

それと総統直筆の色紙がもらえるよ。総理大臣にも会えちゃうぞがんばれよ!」

「あああ〜っ、一番大事なこと言うの忘れちゃった。

24時間誰も死ななかつたらそのとき生き残ってる人の首輪が全部ドカンします!皆死んじゃうぞ。

このゲームが始まってから24時間誰も死ななくても同じだからね。だからそんなつまんねー終わり方にならないように、皆がんばって殺し合いましよう。」

誰も殺さずにいるとお前が死ぬぞ、って事か。まあ、しばらくは他

の奴が誰か殺すだろうけど・・・

現に、このゲーム「やる気」の人いるっぽいし。

「んじゃ、そろそろスタートしようか。

まず、あらかじめくじで決めといた子たちを出席番号の早い順から2分おきに出発させます。

さっきのカバンは出発するときにあげるよ」

「あ、全員ここから出発したらここから半径200mが禁止エリアになるよ

だから戻ってきちゃダメだよ。」

「それじゃあ最初に出て行くのは・・・出席番号5番小野くん！」

「はい!?!」

「いい返事だね じゃ、いってらっしゃい」

小野はバックを受け取った後、出発していった。

「お次は・・・出席番号16番寺谷くん！」

「は、はい」

「はい、いってらっしゃい」

「次は出席番号19番藤野くん！」

「へーい」

「お返事はしっかり」はい』ね。さ、いってらっしゃい」

「次は・・・女の子最初の出発です 出席番号22番松原さん！」

「え？ あ、はい」  
出席番号順だということから最後のほうだと思ってたけど、そうでもな  
かったなあ。

「びつくりしちゃった？はいどうぞ、いってらっしゃい」

殺し合いが、始まっちゃうんだね。

私はカバンを受け取って、皆が行った方向へ進んでいった。

003 開始（後書き）

ここで少女（松原）視点が終わります。

004 犠牲（前書き）

グロ注意です。

## 004 犠牲

小野は走っていた。

地図など見ていなかった。

とにかく、人と会いたくなかったから走った。  
殺されたくない。

15分ほど走っただろうか。

建物の密集している場所で小野は止まった。

「はあ・・・はあ・・・」

運動は得意ではなかった。

なのに15分間も走り続けて、よく途中でぶっ倒れなかったな、と  
小野は自分で自分を褒めた。

「あ」

カバンの存在を忘れていたようで、いまさら中身を調べている。  
もそもそとカバンの中を探る。

( 黒田が言っていたものと・・・あとは・・・武器・・・ )

「あつた」

小野の武器は・・・

斧だった。結構でかい。

(小野だから斧？意味わかんねえ)

実際武器はランダムなのでそんなことはないのだが、そう思ってしまつのもわかる。

(まあハズレではないだろうけど、銃には絶対勝てないな。重いし) そう思い、近くに銃を持った人間がないか探す・・・

(あっ！)

向こうのほうに誰かがいる。

髪は短い。頭の形がわかるので、丸刈りに近い短さだろう。

髪型で判別できるが、ズボンをはいているので間違いない男である。

(・・・武器は?)

相手は何も持っていないかった。どうやら向こうも今武器を確認して



いるところらしい。

向こうの武器は・・・

茶色いナイフのような形のものだった。ちょうど美術で作っているペーパーナイフとそっくりだ。

どうやら木製のペーパーナイフが武器らしい。見事なハズレだ。

(運が悪かったな)

ここでふと思った。

(あいつ、丸腰とおんなじ様なもんなんだから戦えば勝てるんじゃないかね?)

(ペーパーナイフの攻撃を防ぐのはブレザーを着ているだけで十分だろうし)

(勝てる・・・)

(勝てる・・・)

(殺せる・・・)

だが小野にも良心がある。

(でも・・・そんなに簡単に命を奪ってもいいのか・・・？命だ・・・人の命だぞ・・・  
しかも誰だかわからないけどクラスメイトなんだ・・・ついさっきまで、一緒にいた・・・)

小野はしばらく悶々と悩んでいた。

しかし、男がどこかへ立ち去ろうとしたのを見て・・・

(あっ・・・)

(どこかに行ってしまう・・・)

(行ってしまう)

(行ってしまう)

(行ってしまう)

(殺せるのに・・・)

(殺せるのに行ってしまう・・・)

(殺せるのに・・・)

(殺せるのに・・・)

(殺せるのに・・・?)

(殺せるなら・・・)

(殺す!!!)

もう姿が見えなくなりかけた男に向かって小野は全力疾走した。

男の背中が掴める位に近づいたら斧で右肩を切りつけた。

男が振り向こうとしたが、遅かった。

右肩に斧が食い込んでいく。

一気に斧を引き抜いた。

鮮血が飛び散った。



血だまりがどんどん広がる。このままでも出血多量で死ぬだろう。

「・・・トドメだ」

「！」

星野が目を見開く。

ザシュッ

星野の頭に斧が直撃した。斧が食い込んでいく。皮膚の切れ目から血がだらしなく流れる。

頭蓋骨に到達した。ゴリゴリという硬い感触が斧越しで小野の手に伝わってくる。

「・・・」

星野は死んでいた。

小野は星野のカバンからパンと水を取って自分のカバンに入れた。そして斧を星野の頭から引き抜く。

(殺してしまった・・・)

(もう、後戻りは、できないんだ・・・)

無残な星野の死体と血だまりを放置し、

浴びた返り血さえぬぐわないまま小野はどこかに消えていった。

星野篤志 死亡

残り「26 / 27人」

005 欲望

(女の子に触りたい・・・)

(どうせ死ぬなら、死ぬ前に一度でいいんだ・・・)

(女の子のいろんなところを触ってみたいなあ・・・)

そんな事を考えていたのは内野だった。

内野は自他共に認めるエロ男子の典型である。  
どんな言葉よりも下ネタが好きな人間。

(はあはあはあ・・・)

今は地面に寝転がって妄想をしている最中らしい。  
いくらなんでも無防備すぎる格好で寝ている。

「・・・はあ~~~~」

(女の子に触りたい・・・)

(誰でもいいんだ・・・)

(女の子に触りたい・・・)

そんな内野の視界に人間が入ってきた。

問題は、その人間が「女の子」であることである。

(ん・・・あそこにいるのは・・・)

(女の子だ！！)

「はあ、はあ、はあ」

途端に息が荒くなる。

内野はゆっくりと立ち上がった。

そしてその「女の子」にゆっくりと近づいていく・・・

(思春期男子のパワーは恐ろしいな)  
自分でそう思った。



今内野と女子の距離は5m程になっている。  
相手は向こうを向いているので気づいていないらしい。

(ふつつふつつふ．．．はあはあ)

殺される事への恐怖で内野はおかしくなっているようである。

ガシッ！

「!？」

内野は後ろから女子を羽交い絞めにした。

「いつ、いやっ、何するの!？」

秋月だった。

「はあはあはあ．．．ちよつと触らせてよ．．．はあはあ」

「いやあああ!?!気持ち悪い、離してよ!」

「ふつつつつふ、はあはあはあはあ」

「もっつ!」

秋月は力いっぱい腕を振りまわし、羽交い絞めから逃れた。

そしてバッグを持ったまま一目散に逃げ出していた。

「・・・ちっ」

内野の目的は、もはや「優勝」より「女の子を触ること」になっていた。

「・・・あ。」

全力疾走していた秋月はいまさら気づいた。

「・・・眼鏡落としちゃった・・・」

世界がぼやけている。  
物があるかないか、光があるかないかわからなくなってしまった。

「・・・どうしよう」

ここがどこだかわからない、何も見えない絶望に秋月はその場へ  
たりこんでしまった。

005 欲望(後書き)

さっきから「野」のつくやつがいっぱい出てくるなあ・・・

「あ、彩香じゃん」

「え？」

行く当てもなくふらふらとしていた松原に話しかけてきた人間がいた。

伊藤だった。

「あー。純子か。久しぶりだね」

「うん、久しぶり。」

「じゃあ・・・」

二人の会話はそこで終わるかと思っていた。

しかし・・・

「ねえねえ、アタシと組まない？」

「え・・・？」

どうやら伊藤は松原を仲間にしたい様であった。

「で、でも・・・」

（絶対に嫌。純子と仲間になんてなったらどんなことをさせられるかわからない・・・）

純子たちと仲良くしていた時、松原は使い走りさせられていたからだ。  
楽しくなかったわけではないが、さっさと別れたいと内心思っていた。

「いいじゃん。行こうよ、仲間はいたほうがいいでしょ？」

「・・・まあ・・・」

（嫌だ、嫌だ。普段だつてそうだったのに、この状況ならどんな事させられてもおかしくない。

アイツから食料奪ってこいとか、あの人殺してきてよとか・・・）

（でも・・・断つたら・・・どうなる？）

松原は友人の頼みは断れない性格だった。

特に伊藤の頼みは。

（あいつが銃を持っていたら、脅されるかもしれない）

（そういえば、まだ自分の武器確認してなかったっけ・・・）

「ちょっと待ってね」

松原は自分のバッグの中身を確認した。

硬くて冷たい、鉄の感触が指先に伝わる。

これは・・・

(銃だ・・・)

松原の武器は銃だった。銃と一緒に紙切れも入っていた。どうやら説明書らしく、この銃はAKMという物だということ等が書いてあった。

「・・・あのさ、純子の武器って何？」

「ん？あたしの武器？」

伊藤はバッグから細長い物を取り出した。

サバイバルナイフ。

武器だけを見たら、勝てる。相手と自分の距離は5mほどだった。・・・向こうがだんだんこっちに近づいてくるが。

「ねえー、一緒に行こうよ。お願い」

断らせはしないという目だった。

「いせ、いせめん。やめとく」

弱い口調で断る。

「なんで？仲間ほしくないの？一人だったら彩香すぐ死んじゃうんじゃない？」

軽く笑いながら言う。

(笑い事じゃねーっつの・・・)  
心の中で眉をひそめるが、顔には出さない。

「ね、行こう？」

「・・・行かない・・・」

「なんで？」

「・・・。。。」

「アタシの事嫌いなの・・・？」

「い、いや、そういうことじゃないよ」

「じゃあ仲間になろう？友達でしょ？」

(・・・友達が断ってるんならさっさとあきらめろよ)  
松原は苛立っていた。

それと同時に、伊藤と仲間にならない理由―(言い訳)を考えていた。

「・・・友達が死ぬところ、見届けたくないから・・・」

(我ながら良い理由！)  
心の中でガッツポーズをとる。

「何？アタシが死ぬと思ってるの？」

嘲るような口調で言う。

「だって、一人以外みんな死ぬんだよ？その一人になるの？なれるの？」

「……………」

向こうは黙ってしまった。

（今だ！）

松原は方向を変えて全力疾走した。

逃げたのである。

しかし、松原より伊藤のほうがはるかに足が速い。追いつかれるのは時間の問題だった。

（建物の密集してるところに入って……うまく撒ければ……）  
考えながらもすでに疲れていた。  
10mほどあった距離は半分に縮まっている。

その時だった。

ドサツという鈍い音が後ろから聞こえた。



伊藤が転んだ。

松原はジャンプして避けていたが、大きな石があった。それに転んだのだろう。

「う、う……」

伊藤が起き上がったとき、すでに松原の姿はなかった。

「はあ、はあ、はあ……」  
息が上がっていた。

(うまく・・・撒いたみたいだな・・・)  
松原は建物を見つけて、そこに入っていた。  
ここは3階だ。

改めてAKMの説明書を広げてみる。

(自分の武器だから・・・使えなかったら意味無いもんね)

「見ての通り銃です。それ、結構威力あるよ。つまりアタリって事です。よかったね

安全装置とかないから、そのまま引き金を引けば撃てちゃいます。これで射程が長い武器を持ってない子たちをバンバン殺しちゃいま

しよ〜

がんばって殺しあえよ！ 黒田」

メモにはそう書いてあった。

（・・・いいかげんすぎる）

そんなことを考えながら、今までで減った体力を徐々に回復させていた。

疲れと緊張でか、まだ朝とも言える時間なのに眠気が襲ってきたその時だった。

カン、カン、カン、カン・・・

鉄製の階段を誰かが上る音が聞こえてきた。

（誰だ・・・？）

（もし相手が「やる気」だったら、この銃で殺してやる）  
そう思いながら腕は震えていた。

・ カン、カン、カン、カン、カン、カン、カン、トン、トン、トン・・・

階段を上りきったようだ。

ここはこの建物の最上階だ。

つまり、「誰か」はこの階にいることになる。

ドアが開いていない部屋は3階にはここしかない。  
人がいることが人目で確認できないのは、この部屋だけ。

(純子・・・?)

冷や汗が頬の側面を流れる。

ガチャッ

鍵のかかっているドアのノブに「誰か」が手をかけた。

ガチャッ、ガチャッ、ガチャ、ガチャ、ガチャガチャガチャ

ドアに鍵がかかっていることを確認して無理やりこじ開けようとしているらしい。

「だ、誰・・・?」

おそるおそる聞いてみる。

「ア・タ・シ」

嫌な予感は当たっていた。純子だった

「……っ」

「開けてよ。ねえ、友達でしょ？」

「……」

（ どうすればいいんだ？ ）

深い絶望と恐怖が松原を襲う。

古いドア。さび付いたドアノブ。

鍵がこじ開けられるのも時間の問題かもしれない。

……ここまでして仲間にしたというのは、やはり利用するつもりなのだろう。

（……）

「……いいよ。開けてあげる」

松原は（彼女にとっては）命を懸けた作戦を決行した。

ガチャッ

ドアを開けた。

「ありがと……」

純子の高い声が、松原の持っているものを見た瞬間一気に下がっていく。

「なにそれ……」

松原はAKMを持っていた。

引き金の向く先は、純子の頭。

「や、やめてよ、そんなもの友達に向けないでよ」

震える声で言う。目を見ると、心なしかキラキラしている。

「私は純子とは組まない」

はっきりと言った。

「……ふん。」

見下すような、しかし震えた声。

「じゃあ、断った代償つてのを支払ってもらおうかな？」

震える手でカバンからサバイバルナイフを取り出す。

ゆっくりと松原に近づいていく。

刃先は、もちろん松原にむいている。

「刺してもいいの？」「撃ってもいいの？」

無理やり出そうとした伊藤の低い声は松原の地声にかき消される。

「撃ったら純子死ぬよ。この距離だもん」

「さ、刺したって彩香も死ぬよ！？いいの!？」

裏返っている声。「死ぬ」という言葉に敏感に反応している。

「……そっちがやる気なら私も考えなきゃ、ね」

引き金に指をかける。

「!!!!」

指先がゆっくりと引き金を押していく。

もう弾が出てもおかしくないというところまで引き金が引かれた時。

「……」

伊藤は倒れた。いや、気絶したというのが正解か。

「……脅しただけで倒れるなんて……銃ってすごいな」

松原は感心した。

……彼女もかなり怖かったようだが。

(……また会ったりでもしたらたまらない。武器はいただいておこう)

伊藤のカバンからサバイバルナイフを抜き取り、自分のカバンに入れる。

食料も取っておこうと思ったが、伊藤は死んだわけではないのでそれはやめておいた。

「また逃げなくちゃ……遠くに」

松原は階段を下り、建物の外へ出た。

(自分は何でこんなに運が悪いんだろう)

絶望していた。

そして怒りがこみ上げてきた。

(こんな最悪なゲームに巻き込まれてしまったこと。

支給武器が「DEATH NOTE」と表紙に書いてあるだけの黒いノートだったこと。

メガネを落として何も見えなくなってしまったこと……)

(私はなにもしてないのに……どうして……)

秋月はぼんやりと見えるだけの視界を頼りに建物の影に入って、泣いていた。

秋月の悲しみと怒りの原因は、だいたいがノートに挟まっていたメモだろう。

「見た通りです。デスノートです。もちろん名前を書いても誰も死にませんがね(笑)

脅しぐらいには使えますよ。多分ね。

ま、一人でも殺せば他の武器手に入りますし、せいぜい頑張って殺してください



残念でした！来世で頑張りましょう（笑） 黒田「

もちろん、秋月が読み終わった瞬間にぐしゃぐしゃに握りつぶされてメモは捨てられた。

（何で・・・？）

疑問を浮かべるとともに、いくつもの「たら」「れば」が頭を駆け巡る。

もし、支給武器がもつといいものであれば。

もし、校外学習に行かなかつたら。

もし、このクラスが選ばれていなければ。

もし、政府がバトルロワイヤルの試行年齢を引き下げていなかったら。

もし、私がこの学校に入らなければ。

もし、私が別の県に生まれていたら。

この状況は、少しでも、よい方向に向かっていたかもしれないのに。

「うっ、うっ」

恐怖。

絶望。

怒り。

涙が止まらなかった。

(・・・ん)

秋月はふと、遠くに何かがあるのを発見した。

それが生物か、単なる障害物なのかは今の状態では判断できない。

(・・・誰?)

紺色の何かが動いた。どうやら生徒らしい。

こちらに近づいている。

(・・・)

ソックスとスカートの間の肌色がちらりと見えた。

女子生徒だ。

(・・・殺されるのかな)

この武器では戦えない。丸腰と一緒だ。

銃なんてとんでもない、小さなナイフ一つにも今の秋月では勝てないだろう。

女子生徒が近づいてくる。

向こうはこちらの存在に気づいているらしい。

(…………殺すんだ。私のこと。もう、死んじゃうんだな、私)  
そうだかは定かではないが、もうポジティブな方向になど考えられ  
なくなっていた。

女子生徒が、秋月が隠れている建物の前に立った。

すぐに秋月が隠れている影に入った。

「……………」

向こうは何もしゃべらない。逆光で向こうの顔は見えなかった。

(殺すんなら、痛くない方法で殺してほしいな)  
そう思った。

「…………菜那樣？」

「え」

松原だった。

伊藤から逃げて、また行く当てもなくふらふらしていたら秋月を見  
つけたのだ。

成績がいいからかどうかはわからないが、松原は秋月の事を「様付けで呼んでいる。」

何故かはわからないが――（皮肉かもしれない）特に嫌でもなかったので許可していた。

「何してるの？メガネは？」

「・・・落とした」

「落とした!？」

「内野に・・・襲われた?っていうか・・・それで」

「なんだって!」

いちいち反応が下げさな松原。

「で、何でこんなところにいるの？」

「・・・メガネなくて、見えなかったから、隠れようと思って」

「武器は」

「これ」

涙声で言った。

カバンの中からデスノート（もどき）を取り出して松原に渡した。

「・・・これはひどい」

メモは見せなかった。松原を不快な気持ちにはさせたくなかったのだろうか。

「じゃあ、これとこれのどっちか使いなよ」

松原が両手に何かを持っている。

サバイバルナイフと料理用包丁。

「え、支給武器なのに、いいの？」

「これは支給武器じゃないよ。私の支給武器はこれ」

AKMを秋月に見せた。銃だという事がわかって秋月は青ざめた。

「じゃあ何で包丁とか持つてるの？・・・殺したの・・・？」

「いや、殺してない。包丁は家から持ってきた。サバイバルナイフは・・・」

「・・・やっぱり殺したんじゃない？」

「違うよ。純子に仲間にならないかって言われて、断って逃げたら追いかけてきて。」

銃使って脅したらぶっ倒れて、また会っても怖くないように武器もらったといた

「脅したらぶっ倒れたって、撃ってないの？」

「撃ってないよ。引き金は引こうとしたけど、撃つか撃たないかってところで気絶した」

証拠だ、と言わんばかりに減っていない弾の列を見せる。

「・・・なんか、すごいね」

「え！？なんで？」

「だって、相手も武器持ってたんでしょ。それなのに怖がりもせず脅せるなんて」

「・・・怖かったよ。当たり前じゃん、こっちも刺されるかもしれなかったのに」

「そっか・・・」

しばしの沈黙。

「で、どっちにする？」「こっち」「こっち」

松原が沈黙を破る。

「じゃあ・・・こっち」

サバイバルナイフを受け取った。

「わかった。それあげるよ、じゃあ。頑張ってね」  
「え」

どこかへ走っていく松原の背中を見て、引き止めたい衝動に駆られる。

(待つて・・・)

(行かないで・・・)

(一人は、嫌・・・)

「待つて！」

「？」

松原が振り返る。もうかなりの距離があったが、こちらに引き返してくる。

「どうしたの？やっぱり包丁がよかった？」  
「いや、あの・・・」

「仲間になってくれないかな」

……沈黙。

「いいよ?」

「!」

「でも、足引っ張っちゃっても怒らないでね」

「やだ、ふふっ」

ゲームが始まってからはじめて笑った。

「じゃあ、行こうか。サポートってほどのものじゃないけど、とりあえず手引くから・・・」

手を握った。暖かった。

「うん」

優勝は、できないだろう。でも、友達と苦しまずに死ねたらそれでいい。

そう思った。

その時背後から近づくと存在に、二人はまだ気づいていなかった。

008 憎悪（前書き）

グロ注意です。



谷口は孤独だった。

家でも、学校でも、そしてこのゲームでも。

彼女の下の名前を知っている人間は、おそらく担任教師ぐらいだろう。

「谷口 亜里沙」。それが彼女の名前。

（もう、嫌だ）

ただただ、そう思った。

彼女の人生は赤の他人から見ても悲惨なものだった。

彼女は、クラスメイトには一（担任にすら）言っていないがフィリピンで生まれた。

父親が日本人だった。

それで10才、小学四年生のときに日本に行く事になった。

日本の小学校。知らない世界。

そこで待っていたのは、

子供の残酷さが浮き彫りになる行為。「いじめ」だった。

フィリピンで必死になって勉強した日本語を喋ると、「変な喋り方」と罵られる。

誰にでも話しかけられる明るい性格さえも「馴れ馴れしい、うざい」という表現に変わる。

それでも必死に耐えて、五年生になった。  
いじめの方法はどんどん陰湿になっていく。

登校すると机の上に花と「谷口亜里抄 享年10才」という紙が置いてある。

アルコールランプを使った理科の実験で髪を燃やされる。  
トイレの水を飲まされ、モップで頭を押さえつけられる。

給食に一（おそらく理科室から持ってきたであろう）毒物を入れられて死にかける。

靴に画鋲なんて、もはや日常茶飯事だった。

耐えて、耐えて、耐えて。耐え切れなくなつて。

先生にも、親にも言った。「つらい」と涙し、「助けてくれ」と悲願する。

返ってきた言葉が、彼女の胸に突き刺さる。

「あなたにも原因があつたんじゃないですか？」

「私にどうにかできるわけじゃないじゃない。自分で何とかしなさい」

私のせいじゃないのに。私は何もしてないのに、と、何度思ったことだろうか。

彼女は自殺を図った。

小学六年生の2学期のことだった。

動機はもちろんいじめだった。

六年生になり、クラスが変わったにもかかわらず、陰湿ないじめはいまだに続いていたのだ。

彼女の部屋で、手首と首をカッターで深く切っていた。

発見があと5分でも遅かったら死んでいた。

「死」に救いを求め、失敗してしまった彼女を待っていたのは、大人たちの言葉。

「なんで家で死のうとしたんだよ、死ぬなら他のどこかで死んでくれよ」

母の言葉。母はアルコールでおかしくなっていた。

「あのねえ、こういう事件は学校の名誉にかかわるんだ。どうして

くれる？」

教師と校長から口々に言われた言葉。

「アイツ、まだ死んでないの？死ねばよかったのに」  
笑いながら言う。彼女をいじめていた人間たちが。

その後死のうとしても、このことを思い出して踏みとどまった。

彼女は中学生になった。

引越した。

新しい中学校、もういじめは無いんだと安心していた矢先だった。

陰口を叩かれる様になったのだ。

したことをすべて悪いようにうわさに仕立て上げ、みんなに流していたのは伊藤だった。  
次第に嘘まで流すようになった。

クラスメイトからは無視されるようになった。

何を言っても無視された。まるで存在が無になったかのように。

哀れんでいた人間はいたようであったが、誰も何もしてくれない。

（私はいない人間）

明るかった性格は、すでに絶望に染まっていた。

今回、このゲームに放り込まれて最初に思ったことがあった。

（伊藤が殺せる・・・）

死ぬことへの恐怖は無かった。

むしろ、このゲームに入れてくれてありがとう、という気持ちさえあった。

谷口の支給武器は、皮肉にも伊藤と同じサバイバルナイフだった。

（これで伊藤を形がなくなるまで刺す、その後に私も死ぬんだ）

すでに目的はそれしかなかった。

しかし、そう思っても伊藤は見つからなかった。

歩いても歩いても、走っても、どこを探してもいない。

（早く・・・早く、殺したい、死にたい、殺したい）

憎しみ、絶望、怒り、興奮。すでに正気ではなかった。

ただ、歩いていた。何分経っただろうか。

谷口は伊藤を発見した。

(いた!)

伊藤は福田と一緒にいた。しかし谷口の眼には伊藤しか映っていなかった。

(殺す)

(殺す)

(殺す)

(殺す)

(殺す!!)

気がついたら伊藤の腹を刺していた。

「う・・・あ・・・」

低く唸る伊藤。

「きゃああああ!!!!!!」

甲高い声で叫ぶ福田。

「殺す、殺す、殺す、死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ!!!」

男性のような低い声だった。

殺気と、憎しみがこもっていた。

「り・・・ん・・・か・・・た、す・・・け・・・て・・・」

伊藤が福田に助けを求め。

虫の息だった。腹を何度も刺されているからだ。

「ひっ、ひっ、ひいひいひい」

血が何度も、何度も、何度も飛び散る。

谷口も伊藤も、近くにいた福田も血まみれだ。

「お………ね………が………」

言っている途中で息絶えた。

「あ、あ、あああああ………」  
恐怖のあまり福田がへたりこんでしまった。

血だまりが広がっていく。顔が見えないほど、伊藤と谷口は血にまみれていた。

死んだのを確認すると、谷口は伊藤の顔を殴った。  
色が白い、整った顔。

憎くて憎くて仕方無い人間の顔を、

何度も、

何度も、

何度も、

何度も、

何度も、

何度も、

何度も。

既に顔がつぶれて誰だかわからなくなった後も、何度も、何度も。

気の済むまで殴った後に、首をサバイバルナイフで切り付けた。

何度も、何度も、深く、深く。

血が飛び散る。

あたり一面、赤黒い血液に覆われていた。  
もちろん周囲にいた人間は全員血まみれだった。

7度ほど首を刺した後、谷口は倒れた。

「あ、あ・・・」

福田が伊藤と谷口をゆすつている。

起こそうとしているのか。

一部始終を見てしまった福田の眼には、光が無かった。

「死んじやっただんだ・・・死んじやっただ・・・」

心臓の鼓動が無いことを確認して、福田がつぶやいた。

「あ、あ、ああああああああああああああああああ

「死んじやっただ、死んじやっただ、ああああああああああ

叫んだ。精一杯。

この場所にいた人間は全員、頭がおかしくなってしまうのか。

「あああああ、あああっはははっははははははははははははははは、あああああ  
ああ」

笑っているのか、叫んでいるのか。何もわからなかった。

伊藤純子

谷口亜里沙 死亡



残り「24/27人」

009 地雷(前書き)

ちょっとグロいかも。注意してください。短めです。

「・・・ふう」

埋め終わった。

山崎の支給武器は対人用地雷だった。

3つあったので1つ埋めてみることにした。

これまた黒田直筆のメモが入っていた。

「これ、なんだか分からないでしょうけど地雷です。地面に埋めて人が踏んだらドツカ〜ン！します。

でも触ったぐらいじゃ爆発しないので安心してください

一定以上の圧力が加わらないと爆発しませんからね。とりあえず平たい部分を地面から出して

埋めておいて、後は待つだけ簡単殺人 ラクラクでしょ？

自分で踏んじやわないように気をつけてね！ 黒田」

「はあ、本当に踏んだら爆発するのかなあ？」

とは思ったが、踏んでみようとは思わなかったみたいだった。

「とりあえず隠れて見てよう・・・」  
近くにあった木の影に隠れる。

何分経っただろう、一時間は経ったのではないか。  
誰も通らない。

「あゝ、暇だあ。誰も通らないじゃん」  
そう言いながら地雷に近寄る。

「誰か通ってくれないかなあ」  
しかし誰もいない。

はずだった。

誰かが山崎の背中を押した。いや、撃った。

「う・・・!?!」

山崎は倒れた。

地雷に圧力がかかる、そして

大きな轟音を立てて爆発した。

山崎だった肉片が飛び散る。

山崎の背中を撃ったのは、寺谷だった。

自分の存在に気づいてもらえないのに腹が立って、撃つただ。

もともと短気だったが、このゲームに参加してからも精神的にストレスがかかり  
ますます気が短くなっているようだった。

(・・・ふん)

人一人殺したというのに何も思わず、寺谷はその場を去った。

山崎奈美 死亡

残り「23 / 27人」

010 初回(前書き)

今回も短めです。

010 初回

時計を見た。

11時52分。あと8分ほどで最初の定時放送だ。

(・・・もう、死んじゃった人いるのかな)

浜口はそう思った。

この島に1年B組一行が到着したのは9時ぐらいだった。  
ゲームが始まってからはだいたい3時間。

(3時間しか経ってないんだから、誰も死んでるわけないよな)

そうは思っても、きつと「やる気」の人間もいるんだろうと思って  
怖くなった。

ピンポンパンポーン。

デパートの迷子のお知らせのような音が島中に響く。

『こんにつちは〜！黒田です〜す！ゲーム最初の定時放送ですね』  
やけにテンションの高い黒田の声が木霊する。

『じゃあ早速、死んじやったお友達のご報告です〜！  
出席番号20番星野篤志くん、出席番号3番伊藤純子さん、出席番号15番谷口亜里沙さん、  
最後に出席番号26番山崎奈美さん！以上が死んじやったお友達でした〜』

(え・・・!?)

死んでいる。人が。しかも、4人も。

(そんな、そんな、何で!?)

うるたえる浜口。

このまま人数が減っていけば、自分が殺されるリスクも高くなる。

(嫌だ、嫌だ、嫌だ!)

死への恐怖とショックで浜口はパニックになっていた。

お構いなしに放送は続く。

『それじゃあ禁止エリアを発表します〜！

1時間後はF - 5!

3時間後はA - 8!



5時間後はN-2!

この3つのエリアが順次禁止エリアになっちゃいます メモとつと  
けよ!」

「……………」

禁止エリアの放送など聴いていなかった。

今、浜口がいる地点が1時間後に禁止エリアになるということ  
も、彼には伝わっていなかった。

010 初回(後書き)

浜口ピンチ!

## 011 計画

(はあく……どうすればいいんだろう)

岸野は脱走計画を立てていた。

脱走しようと決意したのは、ほんの5分ほど前のことだった。

岸野の支給武器は防弾チョッキだった。

支給されたものがチョッキだと分かると、すぐにそれを着用した。

これで安心だな、と岸野は思った。

でも、本当にこれで弾を防げるのか、不安だった。

しかし、チョッキの効果が試されるイベントは、すぐやってきた。

「香夏子？香夏子じゃん！」

「ん？」

話しかけてきたのは楠原だった。岸野とは付き合いの長い友人である。

だから「一緒に行動しよう」という楠原の要望にも、何の疑いも無く応じた。

殺されかけるとも知らず。

「ねえ」

「何？」

「香夏子の武器・・・なんだった？」

「えー、そっちが先に教えてよお」

「・・・いいよ、あたしはこれだった」

小型の拳銃をバッグから取り出す楠原。

デリンジャーだ。

「銃だよ。香夏子は何？」

しばらく黙った後、岸野は言った。

「香夏子のは武器じゃないんだ、これ」

「武器じゃない」という言葉を聞いた瞬間、楠原はデリンジャーを構えた。

「!？」

銃口が自分に向けられていることに岸野はすぐ気づいた。

「な、何！？やめて、撃たないで！」

「何だよ、最初からこうするつもりだったのに」

「え・・・？」

楠原は「やる気」だった。

死への恐怖に支配され、「優勝」の二文字を手にするとしか頭に無かった。

「武器じゃないんでしょう？だったら反撃なんてできない」

「う・・・あ・・・」

(でも・・・でも・・・これが・・・)

防弾チョッキを着用していたことは、あえて言わなかった。

言つとチョッキで保護されない部分を撃たれるのが確実だからだ。

「バイバイ。今までありがとう、香夏子」

「いやっ」

岸野が逃げ出すのと、ほぼ同時だった。

乾いた銃声が響く。

逃げ出そうとする岸野の背中を、楠原は撃った。

(うっ)

岸野は前によるけるが、倒れなかった。走り続けた。

「……ふん」

(今は強がってるみたいだけど、いずれ死ぬわね)

そう思つて楠原が追いかけてもせず撃ちもしなかったから、岸野は生きていたのだ。

(消耗品なんだね、このチヨッキ)

チヨッキの背中への撃たれた部分は生地がこすれて破れかかっている。

(前から撃たれたら耐えられそうだけど、背中を撃たれたら駄目だな……)

そう思い、楠原や他の人間がいないか探すが、誰もいなかった。

(うう……)

体に傷はついていないが、近くで打たれたので背中にはあざができていた。

(さっきから背中が痛い、どっかやられちゃったのかな)

でもこれが無かったら死んでいたんだ、と思うと岸野は改めてチヨッキに感謝した。

(よし……これで一通り出来上がった、かな?)

岸野の立てた脱走計画はこうだ。

まず、同じように脱走を考えている仲間をひとりでもいいから作る。島の海岸に出て、島を覆う有刺鉄線をペンチで切る。

(ふふふ、ペンチは島の中の家を探したらあったんだ、香夏子って強運)

そしてみんな泳ぐ。船があったら乗る。

こうしてどこか陸地に着いたらハッピーエンド！

・・・いいかげんすぎる計画だった。でも、実行できないことはなかった。

首輪が無ければ。

黒田の言葉を思い出す。

「ちなみに脱走しようとしてもドカンしちゃっからね。」

・・・首輪を何とかできない限り、無理。

(~~~~~ん~~~~~)

そこで計画は進まなくなってしまうていた。

「……ん？」

誰かが遠くを歩いている。

「おーーーーい！」

先ほどのように殺されかける危険も厭わず、岸野は「誰か」を呼んでみた。

「はいーーー！誰ですかーーー？」

「誰か」が返事をした。

「岸野ですーーー！あなたはーーー？」

「香夏子？待っててー、そっち行くからー！」

「誰か」は松本だった。

仲のいいほうではなかったが、話せないほどではない。

「香夏子だったんだ。気になってたけど、怖くて話しかけられなかった」

「あはは、真理華は怖がりだねえ」

「えー、声かけられるほうがおかしいって。殺されるかもしれないのに」

岸野は「殺される」ことへの恐怖は無かった。「今楽しかったらいい」タイプだった。



「何してるの？」

「え？特に何もしてないよ」

「・・・じゃあそ」

「ん？」

「香夏子と一緒に脱走しない？」

「ええええええ！」

予想通りの反応。

「でも黒田とかいう奴が言ってたじゃん。脱走しようとしたら」

「分かってる。だから、首輪を何とかして解除したいんだけど・・・」

「

無理じゃないの？」

「わかんないじゃん、やってみなきゃ」

「うん・・・」

「ねっどつよ、この計画！」

「・・・別に、いいけど・・・」

「やったあー！」

「でも首輪を解除できないことにはどつにもできないよっ」

「分かってるって！さー、一緒に考えようっ！」

「うっっ（乗らなきゃよかったかも・・・）」

場所は変わって、島内自衛隊基地。

(生徒たちのスタート地点である)

「この子たちは脱走しようとしてるみたいだね？」

誰に言うでもなく、黒田が言う。

生徒たちには公表していなかったが、首輪には盗聴器が仕掛けられていた。

話している内容は丸聞こえだった。

脱出や反乱を図る者に先手を打ったりできるが、今はそれをしないつもりらしい。

「はい。でも、こいつらに首輪を解除するのは無理でしょう」

整った顔の兵士が答える。

「だろうね。とりあえず、様子見だな」

黒田は楽しんでいた。

生徒たちの殺し合いを見ながら、生々しい音を聞きながら。

「今回は誰が優勝すると思いますか？」

先ほどとは明らかにトーンの違う声で黒田が誰かに話しかける。

「私は河野に賭ける」

「俺は小野だと思っな」

「大穴狙って、寺谷とか」

年をとった男たちが口々に言う。

どうやら、誰が優勝するか賭けをしているらしい。

「女子なら、俺は福田だと思う」

「あいつはもうだめだろ。だってショックで動けない状態だろ？」

「でも、あいつ武器大アタリじゃなかった？」

「知らない、だってまだカバン開けてないじゃないか、どうしてわかるんだ？」

「あれ？武器がアタリだったのは松原だったか？うーん、多くて混乱するな。もっと死なないかな」

人の「死」を、異常なほど軽々しく考えている男たち。

(・・・反吐が出る)

若い兵士はそう思いながら、黒田の部屋を後にした。

「うーん」

「う~~~~ん・・・」

一方、岸野たちは悶絶するばかりで何も進んでいなかった。

「そつだ、麻里華は武器何？」

「・・・ハズレだった。ラジオとドライバー・・・」

松本はカバンからラジオを取り出す。

「何か聞けるの？」

「うっん、無理みたい」

そう言つて、松本は岸野にメモを渡す。

「ラジオですけど、使えません。壊れてはないけど、島には妨害電波が流れてるからね。」

どう使うかはあなた次第、武器としてはハズレだけでもしかしたら大あたりかもね

P・S 実は島内では通信ができちゃいます。きゃー、言っちゃった(笑)

それと、分解したら何か役に立つかも・・・!?!?ごによごによごによ

・ 黒田「

「・・・結構いい情報書かれてるじゃん」

「でも、武器としては役立たずだから怖かったんだよ」

「ん〜、何か役に立つかも」がきになるなあ・・・」

「(聞いてない・・・)」

「気づいたのかなあ？この子たちが脱走できるか、見ものだね」  
黒田がにやにやと笑いながら言った。

012 強襲（前書き）

グロ注意です。

「007 団結」の続きです。

(殺す)

(殺すんだ)

(今から俺は、人を殺す・・・)

山野はゆっくりと、松原と秋月の背中に近づいていく。

ゆっくりと、ゆっくりと。

気づかれないように音を立てず近づく。

背後に忍び寄ってから40分程度経過していた。定時放送は流れた後だ。

雑談に夢中の松原たちは、山野に全く気づいていない。

(殺す、殺す、殺す、殺すんだ・・・)

山野の武器はクロスボウだった。

撃ち方を覚えるまでに苦戦したが、今は狙ったところに大体当たるようになっていた。

(殺す、殺す)

自分が返り討ちにあう可能性は考えていなかった。

山野は「やる気」の人間ではなかった。

ただ、死ぬことへの恐怖で自意識過剰になり、「彼女たちに殺される」と思い込んでいたのだ。

(殺す、殺す、殺される前に、殺さなくちゃ・・・殺す!!)

クロスボウの引き金を引こうとした瞬間。

ジャリッ

油断した山野は、足で地面の砂を鳴らしてしまった。

「誰!？」

松原が振り返る。

「あ・・・」

力ない声が口から漏れる。



(殺される)

(殺される)

(殺される)

(殺される)

(殺される…)

(殺される前に)

(殺さなくちゃ)

(殺す！)

「うわあああああああ」

叫びながら、クロスボウの引き金を引こうとした。

「いやあああ！」

よく見えていなかったが、今攻撃されようとしているという事は、秋月にも分かった。

パン。

撃った。

松原が、山野の、頭を。  
血が空気を赤く染める。

山野は前に倒れた。

「う、ううわあああああ  
撃たれてさらに大きな声で叫ぶ山野。

「あ、あ……う、う……  
目の前で人が撃たれた事に恐怖を感じて泣き出す秋月。

「……  
何も言わない、言えない松原。

「こ、殺される、前に、殺さ、ないと……  
途切れ途切れに喋る。

山野が最後の力でボウガンの引き金を引こうとする。

ドン

山野は松原に背中を踏みつけられた。

山野は口から血を吐く。  
衝撃で指が引き金から外れる。

山野はクロスボウに手を伸ばすが、一瞬の間を読まれ松原にクロスボウを奪われる。

「う……あ」

山野は息絶えた。

「……殺した……」

「……言い訳するつもりは無い、けど、仕方がなかったんだ……」

「……」

二人の間に重い沈黙が流れる。

「殺さなかったら、死んでた。少なくとも怪我を負っていたと思う」「でも！」

「死にたいの!？」

穏やかな性格の松原が、大きな声で怒鳴る。

「……」

黙り込む秋月。

「……ごめん」

「でも、こうしないと生きていけないんだ、そうでしょう？」  
諭すように言う。

「私だって人殺しはしたくないよ……でも、攻撃されそうになつたら反撃はするつもりだ」

「……」

沈黙。

「……眼鏡が見つかったら、私も役に立たないと」

「え？」

「やっぱり、仲間だもん。彩香ちゃん一人に戦わせるわけにはいかないから」

「……うん。ありがとう。あと、彩香でいいよ？」

「彩香」

「なに？」

「呼んでみただけ」

「何よ？」

「殺し合い」という言葉には似ても似つかない光景。

「……この後どうする？眼鏡探す？」

「ん……一緒に優希恵でも探す……？」

「そうだね。仲間は多いほうがいいもん、一緒に探そう」

また、二人は歩き出す。手をつないだまま。

山野将輝 死亡

残り「22/27人」

「あの子たち、なかなかやりそうだね。素質ってヤツがあるみたいだ」

彼女たちを見た黒田の評価だった。

013 絶望（前書き）

グロ注意です。お食事の方も注意。

013 絶望

( ..... )

心の中に広がる、虚無。絶望。

目の前で友達が殺された。

友達を殺した人間も死んだ。

赤黒い、生暖かい液体が、飛び散った。

一面に広がる、血。

血。血。血。血。

福田は絶望していた。

既に死体の伊藤も谷口も、福田も血に塗れていた。

血は乾いて固い感触をブレザーの生地に残す。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

涙が溢れて、止まらなかった。  
もはや悲しいから泣くというより、ただ眼から涙が流れ出すだけだった。

福田の支給武器はロープだった。

武器としてもハズレだし、今の福田では銃を持っていても戦えないだろう。

(・・・・・・・・ロープ・・・・・・・・)

太い木の枝にロープを結ぶ。

地面に向かってまっすぐ伸びるロープの先には、大人の首が入るほどのわっかが作られていた。



配られたカバンと自分のカバンを重ねた上に乗る。

ロープのわっかに首を通す。

カバンの重なりを蹴った。

足が宙に浮く。

眼球が飛び出す。

下が口からだらしなく出る。

唾液、糞尿がだらだらと地面に垂れ流される。

ベタベタになるスカートの生地。

福田は、自ら命を絶った。

福田  
燐歌 死亡

残り「21/27人」

014 脅威（前書き）

グロ注意です。

「ちくしょう!」

(武器が、欲しい)

(武器さえあれば・・・)

谷川は激怒していた。

ゲーム開始から今まで、ずっとこんな調子だ。

谷川の支給武器は・・・消火器。

「こんなもん役に立たない・・・ちくしょう、ちくしょう!」

消火器を地面に叩きつける。

例のごとくついていた黒田直筆メモにはこう書いてあった。

「消火器です。火事が起こったらこれで火を消しましょう(笑)  
煙幕にはなるから、使いようでは役に立ちます。多分。

まあハズレなので誰かから武器を分捕っちゃって下さい 黒田「

「ちくしょう・・・」

さっきからそれしか言っていない。

(せめて、周りに人がいれば、武器を奪えるのに)

谷川は「やる気」だった。

それにはある理由も絡むのだが、いずれ分かることである、今は説明しないことにしよう。

(ちくしょう、ちくしょう！)

(……ん……?)

遠くのほうに人がいるのが分かる。

谷川はクラス1視力がいい。

米粒ほどの人影を、男子生徒か女子生徒か見分けられるほど。

(女だ。顔は分からないな……)

今回もその視力を発揮し、人影が女子生徒であることを見抜いた。

(……)

女子生徒にゆっくりと近づいていく。

(はあゝ・・・)

谷川に武器を狙われているとも知らずに座って休んでいるのは、川口だった。

(何よコレゝ、使い方わかんないし・・・意味わかんない!)

川口の支給武器は、マシンガンだった。

引き金を引けばいいだけなのだが、怖がりて拳銃が出てくるようなドラマや映画を見ていなかった川口にはこれが何なのか分からなかった。

見りゃ分かるだろ、と黒田がメモを入れていなかったことも災いした。

川口にとってマシンガンは完全にお荷物になっていた。

(・・・気づいてないのか?)  
谷川は思った。

眼が悪くても誰かが近づいていることが確認できるほど近づいたのに、川口は反応しない。

(ああ・・・寝てるのか)  
いつのまにか、川口は寝てしまっていた。

(それじゃあちよつと拝借)  
谷川はマシンガンを手を取った。  
そして水の入ったボトルとパンも取ってカバンに入れた。

逃げ出そうとした、その時。

「ん・・・」

ガサガサと音を立てたからだろう、川口が起きた。

「あれ？」

武器がなく、カバンが軽くなっていることに川口はすぐ気づいた。

「あ、谷川!? 待てー!」  
谷川を追いかける川口。

「はあ、はあ」

水の入ったペットボトルを何本も持っている上、運動には自信が無い谷口。

もう追いつかれそうになっている。

「捕まえ・・・」

川口が谷川の背中を捕らえた、

バラバラバラバラ。

いや、背中にもたれかかった、というのが正解か。

撃った。

とっさにマシンガンを出して、胸から頭を撃った。

川口に乗られた谷川の背中には、血が流れてブレザーに染み込んでいる。



「はあ、はあ、はあ」

川口の死体をどけて、谷川は走り出した。

(これで、殺せる。殺せる、殺せる)

今谷川の前に人が現れたら、それが誰でも殺していただろう。

川口美咲 死亡

残り「20/27人」

「この子やる気みたいだね。何人殺すかな？楽しみだねえ」  
黒田は全ての経緯を笑いながら見ていた。  
「

## 015 救出

時刻は12時48分。

浜口は、まだF-5にいた。

F-5が禁止エリアになるまで、あと12分だというのに。

「はあ、はあ、はあ・・・」

禁止エリアの放送を聞いていなかった浜口は、不安になっていた。嫌な予感がしていた。

「ここが禁止エリアになるんじゃないか？」という予感。

…その予感は的中しているのだが、どこが禁止エリアだか分からないのでどうしようもなかった。

「あれ、浜口？」

「あ・・・」

そんな浜口に話しかけていた人物がいた。松田だった。

「おい、何でこんなところにいるんだ、そこ禁止エリアになるぞ？」  
「えっ!?!?」

予感が当たっていたことをいまさら知る。

「俺のいる所までくれば多分大丈夫だから、早く動きなよ」  
「うん、ありがとう」

こうして浜口は、無事禁止エリア（になる地点）を脱出した。

「どうしてあんなところにいたんだ？放送聴いてなかった？」

「えっと・・聴いてたんだ。でも、死亡者が何人も出てるのがシロツクでパニックになって。」

正気に戻ったときにはもう放送が終わってたんだ」

「そっか・・禁止エリアメモしといたから、写すか？」

「うん、写させてもらっていい？」

「いいよ。はい」

禁止エリアを書いたメモを渡す。

「・・・はい、ありがとう」

しばらくしてメモし終わった浜口がメモを返す。

「いいよいいよ。じゃあ、俺は行くね」

「うん・・・」

「一緒に行く？」

ふざけ半分で聞いてみた。

「え、いいの!？」

「・・・まさかそんな答えが返ってくるとは思わず。」

「・・・別に、いいけど」

「よし!じゃあ行こう!」

浜口はノリノリだった。

そんな二人の姿を、遠くから見ていた人間がいた。

・・・谷川だった。

015 救出(後書き)

またもや浜口ピンチ!

「……あれ？」

遠くのほうに、何か光るものが落ちている。

近づいてみた。

……眼鏡だった。それは、田中にも見覚えのある眼鏡。

「菜那美のじゃん」

秋月が内野に襲われたときに落とした眼鏡だった。

（……どうしたんだろう。とりあえず、拾っとこう）  
眼鏡をポケットにしまった。

「ねえ、どの辺だった？」

「うっん……この辺だったんだよ？」

眼鏡を田中に拾われたとは知らない二人は、眼鏡を落とした地点を探していた。

「建物が近くにあったんだよね・私が彩香と会った建物」

「えー、あれどこにあったか覚えてないよお」

「……」

「もう誰かに拾われちゃってるかも……」  
その予感は当たっていた。

「こうなったら眼鏡かけてる奴から奪うしかないな」

「ええ！？それはだめだよ！」

「冗談だよ……」

「（本当にやりそうだから笑えない……）」

「ん？」

「どうしたの？」

「誰がいるよ。多分女の子だ」

1cmぐらいの人影が見える。

「誰？」

「顔まではわかんないよ」

「あ……あれかな！？あの建物！」  
松原は秋月のいた建物を発見した。

「よし、行こう！」

「でも……もしかしたら、あの人が拾ってるんじゃないかな？」

「！ そうかもしれないな。相手によっては返してくれないかも・

」

「もし殺されそうになったらこっちも反撃しないと……」

「うう……」

もう血は見たくない、と二人とも思っていた。

「……話しかけてみるのも手かな」

「え、さっき殺されそうになったらって」

「こっちは銃持ってるんだよ、相手の武器によっては脅すこともできる」

「でも……」

「どうする？やめとく？」

「……」

「……やってみて」

「分かった」



「お——————い！」

「え！？」

田中の耳に聞き慣れた声が入る。

「誰ですか——————？」

松原の声だ。間違いない。

「あ、彩香——————！？」  
声がする方向へ声を送る。

「は——————い！そつでーす！もしかしてそつちは

「待ってて！そつち行くー！」

「私も行くー！」

「・・・優希恵かな？」

「多分ね。よかった」

「こっち来てるよ。行こう」

「うん！」

1分ほど経ったか。

二人と田中は無事合流していた。

「よかった。優希恵だったんだね」

「うん。そういえばさ、菜那美眼鏡落としたでしょ？」

「え、何で分かるの？もしかして」

「うん。これ」

「眼鏡！！」

二人は歓喜の声をあげる。

「探してたの？よかった、拾つといて。はい」

「ありがとう！」

「よかった、変な奴に拾われてたらどうしようかと思ったよ」

眼鏡をかける秋月。

ぼやけていた視界が洗われたようにはっきりと変わる。

「そつだ。優希恵の支給武器なんだつた？」

「これ」

田中がバッグから手榴弾を3個取り出す。

「手榴弾か・・・」

「二人は？」

「私は銃だった」

「私は・・・デスノートだった」

「デスノート!？」

「ただの黒いノートだよ、完全にはずれ」

「あはははは」

「笑い事じゃなかったんだよ!？だってさあ・・・」

「はいはい、大変だったんだね。うんうん」

「うわあ・・・」

こうして3人は無事合流したのだった。

「ん、あの3人の近くに誰がいるぞ。・・・岸野たちか」

黒田が言う。

その後、岸野たちと3人が

このゲームから皆で脱出する計画を立てることになるのは誰も知らなかった。

017 不運(前書き)

グロ注意です。

(はぁ・・・)

石井は木箱に座ったまま、落胆していた。

自分の支給武器が銃ではなかったから。

彼の支給武器はナツクルダスター。

黒田直筆メモにはこう書いてあった。

「これはナツクルダスターっていう武器です 4つの穴に親指以外の指をそれぞれ入れて、

親指は下の大きい穴に・・・まあ、握りこぶしを作ればオッケーです

(笑)

これを装着した状態で人をぶん殴れば結構な効果が期待できます  
でも、銃を持った相手には

歯が立たないだろうからうまく工夫してください(笑) 黒田」

(はぁ~~~~あ・・・)

せめて射程の長い武器ならよかったのに、とまたため息をつく。

そんな石井に近づくと女子がいた。

・・・楠原だ。

(あいつ・・・誰だろう、多分石井とかかな?)

(何でもいい、私が優勝さえできれば)

楠原は石井を見た瞬間もう殺すつもりでいた。

一方石井は、楠原の存在にまったく気づいていなかった。

下を向いていたから。

(あいつ、気づいてないの?寝てるのかな)  
そう思いながら楠原は石井の背中に近づく。

背中が撃てる距離まで近づく。

パン

パン

楠原は石井の背中を撃った。一発目は背中、二発目は頭に。

血が飛び散るが、楠原は割と遠くにいたので返り血は殆ど浴びなかった。

すぐに石井の上半身がぐらりと揺れ、落ちた。

「……ぐっ」

最後の呻きとともに血を吐き、石井は絶命した。

「……これで2人目ね」

正確にはまだ1人目なのだが、そんなことは知らない楠原は得意げに鼻を鳴らした。

石井直也 死亡

残り「19/27人」



018 誓い（前書き）

グロ注意です。

「なあ」

「ん？」

「あれ、谷川だよな？」

浜口が言う。

「んー、多分そうだね」

松田が遠くの人影を確認し、答える。

「何で話しかけてこないんだろう」

不思議そうに言う浜口。

「見えてないんじゃないか？」

「いや、それはないと思う。谷川、目すごい良いもん」

松田の意見を即否定する。

「……もしかして」

「ん？」

「……俺たちのこと、殺そうとしてるのかも」

「!？」

それに気づいたのは、谷川がこちらに向かって走って走ってくるのとほぼ同時だった。

「逃げる！」  
松田が叫ぶ。

谷川も運動は得意ではなかったが、松田たちの運動能力も谷川より少し上かというぐらいだ。  
長期戦になれば、むしろ持久力のある谷川が有利になる。

走り始めて、1分ほど経った。

「はあ、はあ」

荒い息遣いが重なる。

3人ともすでに疲れてきている。

しかしまだ松田たちのほうが速かった。

松田たちにとっては命を懸けた「鬼ごっこ」だからだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

走り始めて5分ほど経っただろうか。

松田たちと谷川の距離は、すでに10mほどになっていた。

「はま、ぐち」

「な、なんだよ」

「俺が、囹に、なる、から、お前は、逃げてくれ」

「そんなこと、できるわけ、ないじゃ、ないか！」

「でも、ここで、二人とも、死ぬ、よりは、お前だけ、でも、生きていて、くれたほうがいい」

「やめてくれ、もう、喋らないで・・・」

「頼む、俺を置いていってくれ、お願いだ」

「で、も・・・」

走りながら息も途切れ途切れに会話する松田と浜口。

ガシッ

「！」

谷川が松田のブレザーの首元を掴む。

バラバラバラ

髪の毛を掴み、頭にマシンガンを発砲した。

血とも何ともとれないべとべとした液体がそこから中に飛び散る。

「に、げ、て・・・」

最後にそれだけ言つて、松田の頭は重力に逆らえなくなった。

「う、う、うわああああ」

谷川はそれ以上追つてこようとはしなかった。  
でも、浜口は逃げた。逃げた。谷川が見えなくなるまで。

（死んだ、また一人、死んでしまった！）

（死んだ、死んだ、死んだ、死んだ）

（仲間が）

（俺を、助けるために？）

「うっ、うっ、ああああああああ」

立ち止まった。泣いた。

涙があふれて、あふれて、止まらない。

ふと、松田の言葉を思い出す。

「でも、ここで、二人とも、死ぬ、よりは、お前だけ、でも、生きていて、くれたほうがいい」

(・・・二人とも死ぬよりは、と、松田は俺を生かしてくれたのか)

(なら、俺は生き残る。人を殺さずに)

(どんな方法でもかまわない・・・生きる、生きてやる)

地面に落ちる涙とともに、浜口は誓った。

松田幸樹 死亡

残り「18 / 27人」

019 選択(前書き)

グロ注意、短めです。

(・・・)

武内は考えていた。

このゲームに乗るべきか、乗らないべきか。

武内の支給武器は槍。メモは入っていなかった。

殺そうと思えば人を殺せる(相手が銃さえ持っていなければ、だが)武器だ。

(死ぬのは痛そうだなあ・・死にたくないよ、でも、人も殺したくないよ・・)

しかし、理性と本能の狭間でずっと悶々としていた。

「ねえ」

「!?!」

後ろを振り返る。

東だった。

「び、びっくりした」

「なんか考え事でもしてた? ぜんぜん気づかないんだもん」



「うん、実はさ・・・このゲームに乗るか乗らないか、考えてたんだ」

「・・・・・・・・」

東の表情が強張った気がした。

「あたしもだよ。ずっと考えてた」  
自ら作った沈黙を自ら破る東。

「そっか、仲間だ！そっか、一緒に行動でもしない？」

「うん、どうしようかな、まずは決断してからにしよう」

「何？」

「うん、決めた」

パン

「うっ・・・・・・・・!?」

東がM700をバッグから取り出し、武内の腹を撃った。

至近距離だったからか血が大量に飛び散る。

無論、東も返り血をたっぷりと浴びる。

「やっぱりあたし、ゲームに参加することにするよ」

「そ、そんな、どうし、て」

「あたし、死にたくないの。ごめん」

「・・・な・・・なん・・・で」

武内が倒れた。

すでに、絶命していた。

「・・・ごめんね。あたし、本当に死ぬのが怖いんだよね」  
死体に語りかけるように、東が言う。

武内梨乃 死亡

残り「16 / 27人」

「今回は『やる気』の子がいっぱいいて楽しいね」  
小野だろ、楠原だろ、谷川だろ、そいで東もやる気か。見てたえの  
あるものになりそうだねえ」

黒田が気味の悪い笑い声を上げながら、独り言を言っていた。

020 同類(前書き)

グロ注意です。

「風斗？」

「ん」

斉藤に話しかけてきたのは、安田だった。

「何してるの？」

「何してるのって、歩いてる」

「することないの？」

「当たり前だろ。人殺しでもするのか」

「……。」

「……組まない？」

安田が恐る恐る言う。

「……何を？」

「仲間にならないかっていうことだよ」

「別にいいけど」

「よし、じゃあ俺の武器あげるよ」

「え？」

「だってさ、使い方わかんないし。」

銃なんだけど引き金引いても発射されないんだよ。だからあげる  
そう言っつて安田がポケットからワルサーP38を出す。

「……説明書とかなかったの？」

「うん。なかった」

斉藤の武器はフォークだった。  
ハズレ武器の代表といってもいいほどのハズレ。

(武器をもらって安田を撃てば、俺はこの武器を手に入れられるんだ)

(でも・・・)

迷う斉藤。

(でも・・・)

(でも・・・。。)

(いや、やっちなえ！)

「ありがとう」

フルサーパス8を受け取る。

「ところでさ、俺これの使い方わかるよ。教えてあげようか？」

「え、マジ!? 教えて教えて」

安全装置をはずす。

パン

パン

「これはね、こうやって使うんだ」

「うっ……!？」

安田の左胸を撃った。二発とも。

一発は心臓に当たったらしい、高い高い血の噴水が現れる。

「な、なんで、殺さなくても、あげる、のに」

「どうしても独占したくてね・・・」

「……………う、う」

「お前なんか、友達、じゃ、ない」

「最初から友達だとは思ってなかったよ」

冷酷に言い放ち、斉藤はその場を去った。

安田はぐったりと倒れ、そのままこの世を去った。

安田 渉 死亡

残り「15 / 27人」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4688j/>

---

運の悪い子供たち ~ BATTLE ROYALE ~

2010年10月14日13時15分発行